アジア特許情報研究会との出会い

2018 年度は、中国専利年会（CHINA PATENT ANNUAL CONFERENCE、略して CPAC）の第 9 回を迎えます。その会場は、毎年、基本的にオリンピック公園のすぐ脇にある国家会議センタであり、開催時期は、9 月前半ごろが多く、CPAC には「暑さも少しやわらいだ朝に、青空の下、オリンピック公園の敷地に入っていく」という少し晴れやかなイメージがあります。

その CPAC では、朝から夕方まで、複数の会場で講演が行われ、どの会場もいつも満員であり、席を事前に確保しておかないと立ち見になってしまうほどの盛況です。特に、初日の午前中には、中国の知財分野などの重鎮の講演があり、その講演を座って聴講するには早めに会場入りする必要があるほどです。

日本からも多くのグループが毎年この CPAC を訪れ、また、日本からの出展者も、毎年少しずつ増えている印象です。晩餐会では、WeChat（日本の Line に相当）を用いた抽選会も行われるようになり（外国からの方は参加しにくいですが。。。）、また、女子十二楽坊による演奏があったりして、毎年華やかさを増しています。

この CPAC は、第 7 回までは、中国専利情報年会（Patent Information Annual Conference、略して PIAC）と呼ばれており、日本の特許情報フェアのような位置付けでした。わたしが所属する Dragon IP は、2010 年の第 1 回からブースを出展しています。

その 2010 年の頃は、中国知財は日本の知財分野の方々にとってまだまだ少し手探りの情況にあったのではないかと思います。第 1 回ということもあり、中国の特許事務所である Dragon IP として、そもそもブースに何を出展するべきか？というところから手探りの情況でした。

その当時、ちょうど『中国語特許明細書を読む。書く。』（ILS 出版　初版 2012 年 11 月）の原稿がある程度完成した情況にあり、原稿を近くの大学で印刷・製本して読み直したり、出版社を探したりしている時期でした。ブースに展示する資料が事務所紹介だけではつまらないので、それを 3 冊製本して出展してみることにしました。

それはある程度完成はしていても未出版であるため、「PIAC 会場での展示中に、もしも誰かから譲って欲しいと言われても絶対にお断りし、お見せするだけにする」という約束が Dragon IP と著者たちの間で一応交わされました。

ただ、実際のところ、その当時、「この本に興味を持つ人は本当にいるのか？」というところは非常に怪しいものでした。作成中の本を日本の知財分野の何人かの方に見ていただいたりしたのですが、ほとんどの方からの反応は芳しいものではなく、いくつもの出版社からよい返事をもらえていない情況でした。

2010 年の第 1 回の PIAC は、まだ知名度が高くなかったためか来場者もそれほど多くなく、わたしは会場内をブラブラしてコーヒーを飲みに行ったりしているような情況でした。確か昼過ぎ頃だったと思いますが、Dragon IP のブースに戻ると、同僚から次のように言わ

れました。

『さっき日本人２人がここに来て、この製本を熱心に見ていました。そして、この製本を一冊どうしても譲って欲しいと言われたのですが、なんとか断っておきました。このブースにまた戻ってくると言っていましたよ』

わたしは、それを聞いて、「へ～、そんなこともあるんだナ」という程度の感覚しか持っていませんでした。

そして少し経ってから、『あっ、来ました来ました。あの二人がさっきの人たちです』と言う同僚の視線の先には、ある種のオーラをまとった、微笑みを浮かべて少し痩せた男性と、優しそうで目がクリクリと大きい恰幅のいい男性のお二人でした。

その当時、そのお二人とどのような会話を交わしたかの記憶があまりないのですが、そのお二人が、アジア特許情報研究会（以下、「研究会」と略記させていただきます）の創設者であるＩ藤さんと、その主要メンバであるＴ畑さんでした。

Ｉ藤さんのやわらかでやさしい日本語のせいか、Ｔ畑さんの熱心さのせいか、そして、作成中の中国語学習書に思いがけず高い興味を示してくれたことがすごく嬉しかったからか、思い悩んだ末に、結局のところ、上司にも共同著作者にも相談せずに、そのお二人にその製本を会場で 1 冊お譲りしてしまいました。

製本をお譲りしてお二人がブースを離れた後、そして、PIAC が閉幕した後も、わたしの頭の中は、『みんなで一緒に頑張って作ったのに、パクられたりしたらどうしよう。。。いや、そんなことはないはず。。。』というような考えや不安が駆け巡っていました。

それがわたしの研究会とのはじめての出会いでした。その次にどこでお会いしたのかについても正確な記憶はないのですが、その後の交流を通じて、わたしのその不安はすぐに杞憂に終りました。この原稿を書いていて記憶が蘇ったのですが、その初版が出版された際に、お二人に本を贈呈させていただきました。

そのはじめての出会いの後、中国知財に関する事柄について Group Email にて意見交換させていただいたり、新宿御苑に花見に連れて行っていただいたりしました。その後の PIAC でも、ほぼ毎年お会いすることになりました。また、Dragon IP で主催していた「知財分野の中国語読解ゼミ」に、研究会の複数のメンバにご参加をいただきました。

研究会との交流の過程で、研究会のメンバの方々が特許調査に卓越したプロフェッショナルであることを知りました。ただ、わたしが特許調査に素人すぎて、研究会のミーティングの際のお話や配布資料についてほとんど理解できず、わたしは特許調査について今も素人のままです。また、Ｔ畑さんの中国語レベルが実務レベルであり、ここまで中国語をきちんと読める人は日本の知財分野で数人しかいないのではないかと関心した記憶があります。

わたしは、Dragon IP の仕事で中国知財に関する日本 Client からのご質問などに回答をしていましたが、研究会の方々との Group Email を通じた意見交換は、少し特別でした。意見交換する内容がわたしから見てすごくマニアックと言えるものだったためです。

例えば、Ｉ藤さんとは、『出願番号が付与されているが出願公開されない多数の中国特許出願の実態』、『中国国内出願人の早期公開の実態』、『中国特許権の早期失効』、『中国公報に日本語の漢字が混ざっている原因』、『中国公報における漢字の文字化け問題』などについて意見交換をさせていただきました。

Ｔ畑さんからは、『北京で新規開店した特許専門書店の情報』、『中国で新発売された中国知財関連の有用な書籍（例えば、英中特許翻訳の学習書）の発売情報』、『中国の実用新案登録件数の異変の情報』などをいただきました。

それらはいずれも、「そんなことにどうして気づけたのだろうか？」、「その情報は、どこから探し出してきているのだろうか？」などと驚かされるものばかりでしたが、そのような Group Email の情報から様々な刺激を受けたり、仕事の合間の息抜きをさせていただいたりしました。

Ｉ藤さんから送信される Group Email には、『人生は有限です。』などの格言も含まれたりしておりました。また、Ｉ藤さんは『中国語を読めなくても中国特許調査ができる』という講座の講師を担当されておりましたが、Ｔ畑さんは「中国語を勉強した方が早い」というようなツッコミをされたりしていて、楽しく Group Email を拝見させていただいておりました。

先駆者というのは、研究対象に対する高度な技能と Max の好奇心を持ち、その解明に Max の情熱を持って挑んでいる人々を指すのだといえる。彼らが先駆けている際に、その活動をもし一般人が見ることができたとしたら、それはきっとマニアックに見えてしまうのであるが、実はその活動の結果は、多くの人々に利便性を提供するなど、世の中に多大な貢献をしているのである。ただ、一般人はその活動にすら気づかないことの方が多いということなのだろう。

PIAC のために研究会の方々が北京に来られていた際には、中国特許検索サイトである CNIPR を訪問して改善提案を行ったりもしておられまして、研究会は、まさに中国知財情報の先駆者といえます。

研究会の活動は、中国、韓国、台湾だけでなく、すでにインドなどの新興国にも広がっており、今後も、次は 20 周年に向けて、世界の知財情報の先駆者として、ますますの発展をお祈りしております。

北京銀龍知識産権代理有限公司
日本部　雙田飛鳥
（2018 年 8 月 20 日受理）